

大東ふれふれ帳

(3)

観音まいり

百花燎乱すべてのものが
明るさへと向って立つ春、
ひと雨ごとにのびた下萌が
光を浴びて野辺はよみがえ
る五月「野崎小唄」で知れ
た野崎観音のおまつりの季
節です。

若嫁を八日(ようか)び
の風にあててやらんとカビ
が生える、粋なことわざも
さることながら、古くは若
い男女の出逢いの場でもあ
り、近在近郷の人びとの春
の憩いの日々の野崎まいり
も現在では遠く他府県から
のおまいりも多く、五月一
日から十日間、参道の露店
もにぎわいをみせる。

野崎まいりについては今
までに歴史家が執筆し、マ
スコミにもよく登場してい
るので、ふだんの観音まい
りにふれてみます。

本堂に向って右側におま

つりしてあるのが「江口の

君堂」で四月十四日のご命

日毎月十四日の月命日には

子授け、安産、婦人病平癒の

祈願に女性の参詣が多く、

妊婦服の若い女(ひと)、

初老の女(ひと)は身重の

嫁の代参でしょうか、とこ

ろせましと幾人もの女(ひ

と)がお百度をふんでおら

れます。

お堂の中の壁につるされ

た千羽鶴、抱っこ人形の奉

納、白いよだれかけに書か

れた願文などを見ている

と、遠い昔から、秘められ

た女の哀願や、情念がただ

よっているようで、もの悲

しい思いがします。

また、この日はご利益の

やいと無料治療もありま

す。

美しく彩色された官女風

の江口の君は古代、江口の

里で高貴な人が泊られる宿

に居た女(ひと)で、ある

とき婦人病平癒のため、長

谷の観音さんにおまいりし

ていたところ、七日目の夜

仏さまが夢枕に立たれ、野

崎観音にもうでよとのおつ

げでおまいりしたところ、

たちまちにして病いえた

と縁起は伝え、江口の君が

中興開山の祖となっていま

す。

いづれにしても女性専科

霊験あらたか、ご加護を授

かった女(ひと)たちのう

れしいお礼まいりの話も多

いのです。

七月九日の千日まいりは

西国三十三番各札所の観音

さまをおまつりしてあるお

堂で、ご詠歌おどりや、河

内音頭での盆おどりもあり

にぎわいます。

また野崎薬はこの道を志

すものにとつては妙なる色

の辰砂(しんしゃ)、火焔

紅(かえんこう)の本焼を 山での例会も楽しいものだ
主体とした陶芸で、青磁な そうです。
ど油滴天目も作られています 一峰和尚のお人柄か、何
す。なかでも当山の土を混 かといえは集いの場になる
せて作った十二支の土鈴は 野崎の観音さん、五月三日
趣きのあるものです。 より当山の会館で、大東市
冠句会の凸凹社は古く、 明社協主催の「原爆パネル
徳川時代中期ごろに野崎村 展」が一階で催され、二階
に始まり、ユニークな作風 では、油絵の展覧会もあり
の冠吟が今に伝承され、当 ます。(文 岩橋初子)



野崎観音(江口の君堂)でお百度をふむ人たち